

立原正秋全集

第十四卷

角川書店

立原正秋全集 第十四卷

昭和五十八年七月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話東京二六五―七二二一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573414-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたしません

立原正秋全集 第十四卷 目次

舞いの家

五

果樹園への道

三四三

解題

武田勝彦
四三五

舞いの家

坂道

家を出てしばらく坂道をおりて行くと香林寺の前にでる。そこから板橋地藏尊のある中板橋まで下り坂である。そこは箱根の入口で、麓の方では、早川に沿って箱根登山電車が走っていた。

綾は日傘をさしてゆっくり坂道を降りた。着ている白い上布が眩しいくらいの梅雨あけの午前の陽さしであった。通いなれたこの坂道には、綾の三十年の歳月が刻まれていた。

亡父の室町禅竹が、この小田原の板橋に能楽堂を建てたのは、昭和十二年の夏であった。綾が生まれたのは、あく十三年の秋であった。能楽には世に知られているかぎりでは四つの流派があった。観世、金春、喜多、宝生の四流である。室町流が、いつ、どこで、どの流派からわかれて一派をたてたのか、綾にはさだかではない。実証的な歴史学者のように、綾には家系を遡ってさぐる興味はなかった。芝高輪南町の能楽堂が江戸末期の建築であったから、室町流はそれ以前から存在していたのだろう。綾が知っているのはこんなことくらいであった。もっとも高輪の能楽堂も昭和三十四年に建てかえられていた。

中板橋の路上に、タクシーが待っていた。出かけるときにはタクシーに中板橋のバスの停留所まで来てもらうのが、綾のならわしであった。家から坂道を降りる時間をたのしみたかったのである。

綾は小田原駅につくと、東京行の新幹線の乗車券を求め、ホームに入った。

新幹線が出来てから小田原と東京はずいぶん近くなり、わずか三十分で東京に行けるようになったので、綾は、出かけるのがそれほど億劫ではなかった。二つちがいの妹の類は、親世流の能役者のもとに嫁して目黒に居を構えており、類より二つしたの妹の園は、外国車を輸入している会社の社長の長男のもとに興入れし、世田谷の祖師谷に棲んでいる。この三姉妹は、それぞれ夫の仕事をよそに、月にいちどあつまり、おしゃべりをする。あつまる場所は、小田原のときもあれば目黒のときもあり、祖師谷のときもあった。綾は二人の子もちで、類にも二人の子があり、園にはまだ二歳になる男の子が一人あるきりだった。

綾、類、園と三人の姉妹をならべてみて、ある共通点があることに気がつく。それは、幼時から仕舞を身につけてきたために、挙措がたおやかでありながら、どことなく正確な線が見えることであつた。

綾は東京駅からタクシーに乗り、高輪の家にむかつた。高輪の家は、造りかえたときに室町会館にし、室町流の能楽を学んでいる人達のために開放してあつた。綾が二十三歳の秋に室町家に迎えた夫の道明は、綾より七つ年上で、彼は、週のうち月曜と木曜日は室町会館で弟子達を教えていた。そのために高輪で泊ることもあつたが、今度のように一週間も小田原に帰ってこないのは、かつてなかったことだった。

道明は、亡父室町禅竹から、弟子ながらもたぐいなき達人、と嘱望された役者であつた。ことし三十七歳になる道明の能は、世阿弥の言う、盛りの極め、にあつた。このことは、他人が見ている以上に道明自身が知っているはずだった。かつて禅竹はつぎのように言つたことがある。

「能には、かたちがありながら、その実、かたちがないに等しい。かたちの向うに、もうひとつの真実があるだろう、と求めるのも、ひとつの現実にすぎない。この現実が能役者には大切なことだ」

道明は、父のこの言葉を、道元の〈現成公按〉^{げんじょうこうあん}から学びとつた思想だろう、と言つていた。道元は、中世の能の大成者である世阿弥に大きな影響をあたえた人である。したがって世阿弥を理解するには道元まで遡らねばならなかった。夫はこのように綾に父の内面を語ってくれたことがある。道明が禅竹を理解したことは、禅竹が、弟子ながらも

たぐいなき達人、と囑望した事実^{じじつ}に照応^{しょうおう}したことであった。

午前の能楽堂はひっそりしていた。建てなおしたとき、楽屋のうしろに三階建の鉄筋造りの室町会館を建て、管理人夫婦をおいた。夫がここに泊るときには、管理人に夫の面倒を見てもらっていた。

綾は、能楽堂の横をまわって会館の玄関^{げんかん}についていた。会館の一階には売場があり、能面、仕舞に使う扇、袴、能楽に関係した書籍などを売っている。店があくのは午後であった。能楽堂が賑わいを見せるのは夕方からだから、食堂がひらくのも昼すぎである。能楽堂と会館をつないでいるのは鏡の間のうしろの廊下で、幕間に見所^{けんしょ}を出た客はこの廊下を通して食堂や買物にくる。二階は稽古場で、三階は半分が宿泊所、半分が能衣裳などをしまっておく納戸になっていた。

「あら、まあ、奥さまですか」

うしろから声をかけられ、ふりむくと、管理人の細君が籠をさげて立っていた。買物から戻ってきたのだらう、籠から茄子^{かき}がのぞいている。もう五十歳に間がない女で、よく掃除をする性格であった。

「一週間も戻らないので、どうしたのかと思ってきたの。東京は暑いわねえ」

「お電話をくださればよろしかったんですのに。ただいまおしほりを用意します」

細君は廊下を駈けて奥に入ってしまった。駈けて奥に入った細君の仕草が、すこし尋常でないように思えた。

綾は応接間に入ると、扇風機をつけ、ハンカチをとりだして顔の汗を押えた。やがて細君が盆につめたいしほりをのせて戻ってきた。

「上にいるの？」

綾は指で天井をさしながら訊いた。

「いいえ。おでかけになりました」

細君はなにか申しわけなさそうに答えた。

「どこへ出かけたの？」

「それは存じません」

細君はやはり申しわけなさそうに答えた。

「ずうっとここに泊っていたの？」

「はい、それはもう。夜、お出かけになられたこともございましたが、おそくともお帰りになります」

「いつも泊るお部屋を見せてちょうだい」

綾は椅子から立ちあがった。細君がついてきた。

三階には八畳が一間、六畳が二間ある。道明はいつも八畳を使っていた。着がえの衣類なども八畳の簞笥にしまっていた。綾は部屋に入って窓が閉めきりになっているのを見て、夫はここには泊っていない、と思った。ここしばらく部屋が使われた気配がなかった。整頓されすぎており、簞笥のなかの衣類も、使われていなかった。

「ここには泊っていないのね」

綾は細君を見た。

「はい、申しわけございません」

細君は数度頭をさげた。

「なにか、くちどめされているのね」

「いいえ、そんな事はございません。……ここにお泊りでないのは本当ですが、あとのことは判りません」

「昼すぎにここに来て、夕方ここから帰るわけなのね」

「はい、さようでございます」

小田原に帰ってくるかわりにどこか別のところに帰っているわけだ、と綾は思った。具体的には夫が一週間家をあけたことだけが判っており、ほかのことはなにひとつ判っていないのに、綾は、なにかがこちらを蝕んでくるのを感じた。一週間も暑い東京ですごしていることがすでに尋常でなかった。どういうことだろう……。

綾は一階におりて細君が出してくれた冷えた麦茶を一杯のみ、それから車をよんでもらうと、東京駅に戻った。ど

こにいるのか判らない夫の帰りを待っても仕方がなかったし、それに、小田原に戻らない夫を気づかって東京に出てきて、使用人の前で余裕を欠いた言動を見せるのは避けたかった。

新横浜をすぎるあたりから車窓の外は田園風景になる。風景の向うに、ある年の情景が見えた。……綾が父から仕舞を手ほどきされたのは七歳の春であった。そして世阿弥の《風姿花伝》を教えられたのは十七歳の春からであった。女は仕舞を身につけてもよいが、舞台で能楽を演じてはいけない、と女の能役者を認めなかった父が、なぜ能楽論の本をひもといて娘に教えたのか。この事は、父のいないいま、その真意は解らない。「此道に至らんとするは、非道を行はず」と世阿弥は述べていた。非道とは能以外の遊藝のことであった。好色、博奕、大酒も禁じていた。綾は、酒の好きな夫に思いを馳せていたのである。

道明は酒で過つたことが一度あった。前年の春のおわりのことで、山形県の米沢に招かれて舞台に立ったとき、ふとしたきっかけで仕舞を習っている若い女と一夜をともし、その女が、道明を追って東京に出てきた。どこでどのように広まったのか、道明は独身ということになっていた。その女は室町会館で小田原の住所をきき、小田原に道明を訪ねてきた。綾が女と会い事情をきいた。女が帰ってから、道明は、あれは成りゆきで仕方がなかった、と言った。

「相手は素人ではありませんか。成りゆきだなどと……」
綾は悲しみを押えて夫の顔を見た。

「済まないことをした」

「わたしにですか、あの女にですか」

「両方にだ」

「軀をまかせたあの女にそんな感情を抱く理由はないではありませんか」

「うん、まあ、それはそうだ」

夫は曖昧なことを言って逃げた。

このときの件はこれで終ったが、綾の裡には危惧があった。かたちこそ異なれ夫は再びあのようなことをするので

はないだろうか……それにしても、一週間も帰宅しないとは、思いきったことをするものだ……。

坂道の木立では蟬が午後の日ながさを告げていた。亡父禪竹は四十歳のとき妻に死にわかれていた。綾が十歳の冬のことで、以後、禪竹は再び娶らず、赤坂に囲っていた藝者の栄子を小田原の家に女中代りに入れ、最後まで栄子を籍にいれなかった。栄子はよく出来た女だった。園が興入れしたのは昭和四十年の秋で、禪竹が没したのはそのあくる年であった。栄子は三人の娘と禪竹の面倒を最後まで見て身をひき、いまは、沼津で小さな呉服屋をやっている。綾はこの坂道をのぼりおりして小田原で高等学校まで通い、やがて東京の女子大にはいった。二人の妹のように他家に嫁がず、ここでうまれ、ここで生涯を終る身であった。家を出て行く栄子から、綾さんがこの家を守るのですよ、と言われたのを、綾ははつきり憶えている。栄子は室町家にて二十年、禪竹の影で働きながら、能の宗家の重さを見てきていた。

「お栄さんがこれまでわたし達を育てたのはたいへんなことだったと思うわ」

と綾は類と園に言ったことがある。二人の妹もこのことは知っていた。母が没したとき園は四歳だったから、栄子はまったく主婦代りであった。

坂道をのぼりきり、綾は自宅の門の前でほっと一息ついた。そして屋敷の右側にある能楽堂を見あげ、それから玄関に歩いた。

玄関の戸をあけたら、手伝女の孝子が廊下を駆けてきて、旦那さまがお帰りになりました、と告げた。

綾は茶の間に入ると、麦茶をちょうだい、と孝子に言った。茶の間は家の北側にあり、裏庭は竹林である。夏はいちばん涼しい場所であった。

「いつ戻ってきたの？」

綾は麦茶をのんでから孝子にきいた。

「奥さまがお出かけになられてから間もなくです」

「なにか食べるものをちょうだい。お茶漬でいいわ」

「あら、まだお昼を召しあがっていないんですか。すぐ用意します」

孝子は台所に出て行った。

綾は、孝子が食事の用意をしているあいだ、居間に行つて別の上布に着がえた。いちど外に出てくると、麻の長襦袢は汗だらけになる。綾は脱いだ上布と襦袢を持って茶の間に戻った。上布は霧を吹いてつるしておくと皺がのびた。襦袢は水洗いする。こうした着物の手入れ方法を教えてくれたのは榮子であつた。

心得た孝子が上布と襦袢を持って別の部屋にさがって行き、綾はおそい昼食をとつた。こちらから聞いたですことはあるまい、あの人が言いだすまで待てばよいだろう、と綾は箸を動かしながら考へた。土曜日は道明が小田原のこの家で謡を教える日であつた。彼は先週の木曜日にここを出て今日戻ってきたのであつた。今日は水曜日であつた。夫が一週間も戻つてこないのを黙つてみていたのか、と綾は自分に訊いた。管理人の細君に言われるまでもなく、綾は室町会館に電話をしかけたことが何度かあつた。

食事をすませた綾は夫の部屋に行った。

道明は能面をとりだして眺めていた。

「一週間も家をあけるなんて、ずいぶん思ひきつたことをなさるのですね」

綾は夫の背後にすわりながら声をかけた。

「そうだね」

道明は右手に若女わかおんなの面おもてを持ち、それに見入つていた。

「まるで他人事たにごとのようなおっしゃりかたね」

「一週間、家をあけたのだから、弁解べんげのしようがない」

「どこで、なにをなさつていらしたのですか」

「ホテルに泊つて、まいばん酒をのんでいた。高輪はクラーラーが入つていないんで暑くて泊れないんだな。まさか、クラーラーの入っている能楽堂で泊るわけにはいかなかったし」

「それでは答えにはならないじゃありませんか」

「だから、いま、いったように、弁解のしようがないんだ」

「それでは、一方的すぎるじゃありませんか」

「そうかね」

道明は面を膝元におくと、はじめて綾をふりかえって見た。

「一週間で、ずいぶん、お顔のかたちが変わりましたね」

「そう見えるだけだ。僕はかわっていないよ」

そして道明は再び面に顔を戻した。見なれない小面こおもてであった。買い求めたのだろうか、と綾は横から小面をのぞきこんだ。

「お求めになったのですか？」

「安居堂あんどうが持ってきた。すこし安いと思ったが、もらっておいた」

「河内家重かわちですね」

「そうだ」

「いくらしました？」

「四十万」

「河内家重が四十万で買えるわけがないでしょう」

「だからはじめは贋物かと思った。しかし、これは本物だ」

道明は面を綾の前においた。

綾は面の裏を見た。天下一河内、と焼印が捺してあった。焼印を見るまでもなく、彩色はあきらかに河内家重であった。河内家重は桃山時代から江戸時代初期に生きた能面師であった。

「あるとき払いでいいと言っていた」